

高校

観点別評価

～生徒一人一人を見取るためのメソッド～

高校では「観点別学習状況の評価」の明記が義務付けられ、現場からは戸惑いの声も上がっています。生徒全員を余すところなく見取るにはどうすればよいのか。「高校生の美術」シリーズの著者である村上先生と中村先生の対談の模様を、グラフィックレコーディングによる図解と併せて掲載します。

観点別評価、ここがポイント

中村 中学と同様に高校でも3観点についてABCで評価することになり、今現場は「どうやったらいいんだろ」と慌てている状態です。3観点で評価する際のポイントはどこにあるのでしょうか。

村上 まず「知識・技能」においては、造形的な視点をしっかりと押さえながら技能を働かせているかがポイントです。例えば単純に見たままの色を塗るのではなく、暖かい表情を出すために黄色や赤を混ぜようかな、というように、造形的な視点を意識できているかどうか大切です。

次に「思考・判断・表現」ですが、これは鑑賞・発想・構想がポイントとなります。例えばビクトグラムをデザインするとしましょう。最初に様々な既存作品を鑑賞し、そこに込められた思いを読み取って、その上で発想・構想しデザインする。そして皆の作品を鑑賞し、ビクトグラムは単純化されたものでありながら情報を豊かに伝えるものだという学びが残る。その理解の深まりが重要です。

最後に「主体的に学習に取り組む態度」ですが、これは単に一所懸命さを見るのではなく、発想・構想・技能・鑑賞の能力を身に付けようと、試行錯誤しながら、能動的、主体的に取り組んでいるかがポイントになります。生徒の工夫する態度や試行錯誤も含めて見ていきたいですね。

題材名に「ねらい」を込めて

中村 「思考・判断・表現」で発想・構想のお話が出ましたが、私は題材名に「何をねらいとしているか」を入れ込んで、生徒が発想・構想に関する目標を理解しやすいようにしています。例えば題材名を「風景を描こう」ではなく「私の気持ちにのり入りの場所を描こう」と光と影を意識して奥行き感を出そう、のようにすると、少し長くなってしまうですが、生徒はこの授業全体が何を評価される題材なのか捉えやすくなります。

村上 確かに「粘土で手をつくろう」とだけ言われても必要感がないですし、どうせ自分はリアルにつくれないからと意欲を失う子もいるでしょう。またそのような題材設定では、最終的には再現性でしか評価できなくなってしまうと思います。

中村 私は同題材のときには「手は口ほどにものを言う」と自分らしさを手の形で表そう、という題材名にしました。「何をしよう」だけではなく、「何を学ぶのか」を題材名に載せていくようにしています。

村上 美術教育で大事なことは「主題の生成」です。表したいことは何なのかを考えて造形的な視点を意識して発想・構想する。それが抜けるとどうしても技能中心の授業になってしまいます。「表したいことを見つけて表す」。そこがやはり大事なところだと思っています。

漏れなく見取る座席表メソッド

中村 実際に評価するシーンでは、クラス四〇人いたとして、全員にABCを付けていくと、それだけで授業が終わってしまふ、という声も聞きます。

村上 そこで授業の前半は、Cの状態にある生徒を見つけて、その子たちに対してアドバイスしていきましょ。まずはCの子をBに押し上げていく指導をすることが大事なんですね。作品が完成に近付くと質的に優れた存在が見えてくるので、その子たちにはAを付ける。こうするとスムーズにABC評価ができます。もちろん、授業後に提出された作品からも見取り、ワークシートと作品を照らし合わせた思考の深さなどで評価を修正することもあるでしょう。そこは臨機応変に見ていきたいところです。

それから、座席表を記録簿にして「正」の字を書いて評価していく手法もオススメしたいですね。

中村 その手法を実際にやってみましたが、正の字というのがとてもいいですね。一覧性があるので、フォローすべき生徒がすぐに見つかります。そしてよりよくなった生徒については、例えばCを消してBと書くのではなく、一画ずつ足していけばいいので時短になり、その分の時間を指導に割くことができます。四〇人学級でも恐るるに足らず。生徒の名前のリストから座席表に流し込めるデータも用意しましたので、みなさんに活用いただけたらうれしいですね。

主体的な学びを生む空気感

中村 座席表での評価にプラスして、私は全員発表・全員展示を心掛けています。「この作品は何というタイトルで、こういう意図でつくりました」と全員に発表してもらうんですね。展示も、一部の作品をセレクトするのはではなく、全作品をフラットに並べる。そうすることで、生徒たちの多様性を認める態度や自己肯定感、創造活動へのモチベーションが向上するように感じています。

村上 それは、主題を大事にしている授業だからこそですね。お互いの発想・構想を認め合えるような授業であれば、生徒たちもそれぞれいいところを理解してもらえるので、他者からの評価に対する納得感を得られやすくなります。

中村 発表会でも、発表する生徒にみんなで拍手を贈り、受容的な場をつくるように心掛けています。美術の授業では、他の生徒の制作や発言から、発想・構想の広がりを得ることもあるので、肯定的な空気感、主体的な学びにつながるように思います。

評価に使える座席表のデータはこちらから



村上 尚徳



中村 美知枝



守随 佑果



グラフィックレコーディングとは：議論や対話などの内容を絵と文字と図で記録し、リアルタイムで可視化する方法。

俯瞰的、直感的な理解につながる手だてとして様々な場で注目を集めている。

大七カにしたいポイント

生徒の中に学びを残すために…

何を評価する？

何を指導する？

主体的に学習に取り組む態度

造形的な視点を意識する

知識・技能

思考・判断・表現

発想や構想の指導をしっかりと行う

題材の設定で気を付けたいこと

描くだけでなく発想や構想を大切にしたい。題材名と指導の立て

目標
指導
評価

自画像

表情は？
ポーズは？
角度は？
背景は？

題材名の工夫

「自分らしさを表そう」

「〇〇」な私を描こう

ココ大切

再現ではなく表現へ

発想・構想の指導をしなければ評価もできない…

効果的な評価方法

～Cの生徒をなくしていくために～

Cの生徒を見付け
Bへ
声かけ
アドバイス
できていない生徒を見付けて伸ばし
授業改善を目指す

例えば…「効果的に記録をするために」
記録簿の工夫
悩んでいる子を見える化するために
Excelなどをついておく
座席表をつくる方法
正の字
「カエデ」
教室

例えば…「生徒一人一人の意図や工夫を理解するために」
こんなことを考えていたのか！
↓
評価へつなげる
全員が完成作品の発表をする
こういうこと面白いね！

指導の改善のために評価を生かしましょう
まずは題材名から変えていましょう
村上 尚徳先生
中村 美知枝先生